



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

大学院の学生とき、看護師さんから聞いた話である。大学院生といっても医学部を卒業し医師免許を得てからの入学なので、履修や研究に差し障りがない範囲で外来に出ている。

ある医師が、患者さんの診察・検査をして、ある臓器のがんを強く疑った。患者さんががんの可能性が高く、それはまず間違いないだろうと説明したところ「先生、絶対にがんですか」と聞かれたので、その医師は「99.9%がんです」と答えたそうだ。どんなことでも100%と断言はしに

く。すると患者さんは「先生、分かりました。僕は残りの0.1%に賭けます」と言われ、驚くべきことにさらに検査を進めた結果、がんではなかったとい

〈6〉統計学を超えて

うのだ。この逸話は、その医師が誤診をしたのと患者さんが独特の判断をしたことが重なったまれな出来事である。

臨床医学では至る所に統計学が登場する。例えば、この方法で検査した場合何

%の人にこの臓器のがんが見つかるとか、このくらい進行度合いのこついつた病気にこのような治療を行った場合の5年生存率は何%だとか、あるがんと手術後の無病生存率、全生存率、再発率はどうかといった具合である。そして実に多くのデータが取られ、われわれは診療の参考にしている。新しい薬の臨床試験をするときにも、従来の薬と

比べ効果が優れているかの判定は統計学的な手法で行う。私たちは、人という個性がさまざまに不確定な対象を相手に診療しているのだが、実際に患者さんを診ていへど、臨床統計で出され

ているデータにあらかた当てはまることが多い。医療の世界では統計学のデータになんと従順なのだろうと感じたりする。しかし、それを乗り越えてもっと良い結果を求めたいと思いつたら、基礎研究や臨床に打ち込んだ。

医療の現場から実社会に目を向けると、現代社会では予測がつかないことが多い。もちろん経済の専門家なら景気の予想をするし、地震学者なら地震の予測をする。しかし私たちに、その伏線があるにしてもいろいろな出来事が突然やってくるように見える。私個人についても思いもかけない人との出会いもあれば、思いもかけない経験もある。つくづく、ありがたくも不思議であると考えたりする。